

「ドンドン」ドンドン……ドンドン」

静かなる村里には淡紫の夕べが近よる。さつきから鎮守の森からは太鼓の響が村一ぱいを流れる。あの部落にもこの部落にも長い幟が山のこかげに、松並木の間に見える。祭客が三三五五、丘の小路を往来する。

私はなつかしい幼い記憶をたどる時、涙ぐましい心になる。「村の祭が来た」純におどる小さき魂の前には、万物は輝いていた。森も祭、家も祭、道路も祭、川も祭、眼にうつる全ては祭で輝いていたものだ。

「汝のその純なる魂はどこへ行った。祭が来たからお金が財布にはいるというのではない。名声が得られるというのではない。他人を陥れてやろうというのではない。ただ、祭に心が躍るのだ。汝！ 汝！ 汝のその美しい輝ける魂の光はどこへ消えたのか。」

今日は学校の遠足である。母からもらった銀貨を一個大切に帯にまいて、ある町に行った。その帰り路、一個の銀貨を全部赤や青や黄の給具にかえてかえって、床の上に小さな盃を十四五も並べて、それに全部を溶かし、好きな好きな絵をベタベタ描いていたら、母が帰って、つまらぬことにお金を使った、と叱られた。けれども彼にはその理由が知れなんだ。一つ一つの盃の中に真赤、真青の色が溶かれているのを見た時、そのように清い心ではなかったろうか。経済だとか損益だとか、こんなことを夢にも考えないで、美しい桃色に輝いていたその汚れのない心はどこへ行ったのだらう。

「汝よ！ 汝の今はあまりに金のことを考えすぎはしないか。金にしか目のない汝の周囲は、汝が金を与えられないと考えた時、全部が灰色に見えはしないか。計算のない清い世界を失って、汝が慈善事業に金を出す時さえ、ソロバンを左手にし、周囲を見まわして相談したいほどの、さもない心になつてはいないか。おお汝の墮落、魂の堅い殻、それを見つめて泣いたことはないか。」

太郎と、正雄と、勇三と……たくさん一緒に、お山の上で兵隊ごっこがはじまる。大将もいる。旗手もいる。兵卒もいる。けれども大将も賢い。旗手も兵卒も平等に賢い。熊公の子供が大将にもなれば、村長様の息子が兵卒にもなる。喧嘩もすれば、なぐりあいもする。けれども、彼らは思うままを言いもすれば、行いもする。喧嘩しても一泣きすればすぐ晴れる。

「汝よ。お前は何故そう利巧になったのだ。お前は何故に金持の前に出た時、厳しい肩書の人の前に出た時、上官の前に出た時、監督の眼の光る時、なぜお前はそんなに、羊のように、唾のようになっているのだ。まるで魂のない人形のように、地獄の閻魔大王の前に立った亡者のように、ビクビクした、灰色な、恨めしいような、卑屈な眼をしているのだ。言いたいことも言えず、したいこともなし得ず、何がどうなつても頭をたれている、その心根は一体何のためなのだ。汝の心はずるくなつて来た。そうして人の御機嫌をとりたいたか、そうして人に認められたいのか。貧弱な自分をつつ

みたいのか。一体それは何のためなのだ！ 何故、村長の息子も、熊公の息子も平等に賢かった昔の世界を失ったか。お前が尊敬すると言ってもそれは衷心からではないのだ。お前が丁寧な言葉を使ってもそれは、お前の卑怯な狡猾さなのだ。

お前は又、お前よりも富の小さい、智識の足りない、地位の低い人を見た時、なんでそんなに威張るのだ。お前の肩書をとった時、一体汝に何があるのだ。肩書は肩書であつて汝ではない。身代は身代であつて汝自身ではない。地位は地位であつて汝自身ではない。」

幼い思出にひたつていた私は、思わず世の中に眼をやりました。現代は全く、行きづまつているのではあるまいか。何故でしょうか。現代人たちはみな「自分自身」を忘れたからであります。富の力を知り、名利を知り、地位を知り、学位を知つて、自分自身を忘れたのであります。あの人が尊いというのは大臣だからであります。その人が賢いというのは学者だからであります。あの人を上置くのは、金持ちだからであります。何もしない老人には見向きもしないのは、それには、何もこんないかめしい附物がないからであります。ですから、人にあがめられようとする者はみな、こうした附物を持つことに苦しむのであります。附物を得んために一生を営々とし、多忙に使うのであります。人間と人間とが集つた時、そこにはこうした附物の鉢合せがはじまります。人は皆、自分自身の尊さや、大切さや可愛さに目覚めないで、富と地位と名誉と権力に自分を忘れたのであります。

銭がほしさに心にもないお世辞を流したり、策略をめぐらしたり、嘘を言つたりします。地位を得るために、上官にペコペコしたり、金を出したり、七重の膝を八重に折つて選挙民に頭を下げたりします。

月給が多くとれるために、学校に行つて勉強します。青年の頭は月給の多い方に流れて行きます。自分自身のために勉強しないで、金や、地位や、名誉のためであります。

涙の出るほど悲しく淋しい事柄は、宗教家と言われる人さえも、こうしたさもない心になつてしまいました。僧位が何でしょう。学位が何でしょう。宗教の大学に行つてゐる人の口から、「卒業すれば文学士ですからね。」それを聞いて何で淋しげにいられますよう。

地位と名誉と富とのために動いてゐる人は、それがどんなに尊ばれようとも、私にはちつとも尊敬したい気はしないのです。

自分自身を失つて、地位とか名誉とか富とかに盲になつてしまつて、それを当然のことにしてしまい自分を玩具にしている人に、なんで真実の道が開けましょうぞ。なんで生きた世界に出られましょうぞ。人間の道とか、愛とか、信仰とか、そんな道が開けましょうぞ。そんな生きた道に進まれないのはあまりに当然のことであります。

「この世のことと、未来のことを一緒にしてはいけません。」などとそんなことをよく聞きます。そんな人には決して真実の信仰は得られないはずであります。この世では金を得るために、名誉を得るために、地位を得るために、自分自身の魂に虫の息

さえ通わぬほど真実を見失うた日暮しをしていながら、未来では極楽などと、それはあまりに勝手なことであります。しかも今の浄土真宗はそんな有様になっています。信仰といえども、それは勝手放題な日暮しの、言いわけになつていっているばかりなのです。こんなことになれば国家も亡びます。人道もすたれます。

痛ましくも、如来絶対の大慈大悲も、名誉や地位や富などに目のくれたあさましい人間生活の言いわけになつてしまつて、人を目覚めさせず光にはならなくなつてしまつたのです。

信仰問題だと言つても、唯それは寺の本堂や、お内仏の前だけで、言葉のさきや、頭の中で取り扱う一夕の遊び事になつて、人間の実生活とはかけはなれたものになつてしまいました。頭の中だけで仏いじりをしたり、神の話を弄んでいたつてそれが何になりましょう。

多くの人たちが「信仰がなぜいりますか」と問います。私は答えに困ります。信仰が必要だかどうか議論する前に、自分自身を考えねばならぬのです。

富を積んで財産家になろうとする心は何にもならぬ心で、これが醜い心であることに目覚めねばなりません。

地位を得ようとする心も汚い心であります。これに見切りをつけねばなりません。名誉を得ようとする心も卑しい心であります。名譽心などに支配されている人を見ると寂しさを感じます。名譽は自然についてこそ尊いのです。けれども初から名譽を目につけて、評判のために、自分を高く売るためにしていることは、ちつともほめたことでも、いいことでもないのです。尊い人格者は名高くなることさえ嫌つたのであります。

何の価値もないそうした一切の遊戯に、一度は見切りをつけねばおられませぬ。そうした人間の奥深い魂の求めからかけはなれた欲望が心の全部をしめている間、その人の生活は、そのまま死んでおります。そのままが三悪道であります。親鸞聖人様が、自分自身の営み全部を見られ、社会の全部を見られ、宗教の全部を見られて、一切に対してきれいさっぱり見切りをおつけになりました。

「よろづのことみなもて、そらごとたわごとまことあることなきに」とのみ言葉は決して、口先の芸当ではなかつたのです。口では「まこと人間のしていることは何のことやらわからない。富も地位も名譽も、何にもならぬ」と言いながらも、その実は、朝から晩までを、富を無理非道によつてでも得ようとして、それを正当なことだとして、火のついたほど忙しく働いているような、そんな閑事や、遊戯が何になるのでしょうか。「これがやめられんのだ。そこをこのまま救つて下さるから有難い」などと、人一倍の貪欲にはまつている老人など見るとたまらなく、聖人のみ胸を思つて泣かざるを得ないのであります。

「よろづのこと、そらごとたわごと」の言葉は今の時代にも生きています。全てのその生活が、身代競争であつたり、血の通わぬ地位とか名譽とかを得たいばかりの日暮しであるならば、それは全部がそらごとたわごとであります。そうしたガタガタしたものが集つた社会であり、それによつて造られた社会であるならば、それによつて形

造られた家庭であるならば、そのみを満足するための学校であるならば、それらは全部そらごとたわごとでしかないのです。そらごとたわごと知りつつも、その生活で一生ををわる人も、そらごとたわごとであります。そらごとたわごとの生活はもちろん、真実の世界ではないのであります。

私の魂が生きれば私の周囲は全部生きています。私が生き生きしていれば私のしていることも生きています。私の住む世界も生きています。魂が死んでおれば、私の作すことも、周囲の世界も死んでおります。

近頃、支那の学者□鴻銘氏が日本に来て演説されたその講演が、新聞にのつています。彼の話の中に、今度八十八歳になった大倉喜八郎が、支那の俳優をやつて帝国劇場で、米寿の祝いをしたことについて批判しています。日本の悪い兆候だと教えています。大倉という人は一生をただ金のために働いた人だそうで、その人が自分の富を誇るために、こんな挙国一致でひきしまろうとしている時、あんな馬鹿なことをしたのだというのであります。「どうもやり方がまちがっていると思います。御承知の通り、東京は昨年の九月、地震に見舞われてひどい目にあつたのであります。即ち哀れな沢山な人は、バラックのうちに真に悲惨な生活を送っているのであります。そこで私は思いますに、本場の日本人ならあんな俗悪な、下品な、富の示し方をしないで、それに使う金をこの哀れな人々に分けてやつたらと思ひます。」「もし孔子がこの人に出会つたなら、ステッキをあげてこの老人を打ちなされたと思ひます。」と言ひ、更に、総理大臣がこんなつまらぬ、俗悪な富の示し方をする場所に出席したことを笑ひ、更に政府がその場所に多数の警官を出して守つたことについて、ひどい批評をしています。

即ちほんとの軍国主義は善人が悪人に苦しませられないための保護をするので、間違つた軍国主義は金持だけを保護するのだと言つています。私はこの事実の内に色々な教訓を得ますが、私の思つた第一は、死んでいる者のすることは死んでいる。その周囲も死んでいるということでもあります。彼は一代に数十万円の富を造つたでしょう。数百万円の金を公共のために出しましたでしょう。そうしたことによつて男爵にもなつたであろう。けれども私はそうした彼の全ての中心が、富を得るため、それを誇るため、名誉を得るためであつて、そこには生きた何物もないのであります。ですからしていることも死んでいるのです。警官に保護されながらの長生きの祝いに、何の光がありません。

私も民族が有するお伽噺に「花咲爺」というのがあります。花咲爺は生きていました。彼には学問もない、富もない、地位もないけれども、彼は生きていました。彼が生きているから彼の周囲にいる犬が生きています。慾のために働いている慾兵衛は、その生きている犬を殺します。生きている花咲爺がそれを悲しんで、樹を植えるとは生かすん太ります。それをもつて白を作ります。ちぢが生きているからその白も生きています。その白で餅をつけば宝物になります。ほんとの魂が死んで、慾のために働いているちぢが白をかりてつけば、餅はうじ虫にかかります。慾兵衛は白をこわして焼いてしまひます。花咲爺がその死んだ灰を持つと灰が生きて来ます。

枯木にその生きた灰をかけると、枯木も生きてきて美しい花を咲かせます。慾ぢぢがその灰を持てば、灰も枯木も生きるはずがないのであります。私はこのお伽噺の裏に生き活きている者の権威を知ります。

慾のために、名誉のために、地位のためなら、それがどんなに働いてまいしようとも死んでいきます。死んでいる者は亡者であります。地獄、餓鬼、畜生であります。

「まことに知んぬ。悲しきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して定聚のかずにいることをよろこばず、真証の証に近づくことを快まず。はづべし。いたむべし。」

この信巻の血のにじむようなお言葉のどこに親鸞聖人は、煩惱生活をそれでよいと許しています。富を積むばかりの日暮しが当然だとゆるされ、名利や愛欲をあたりまへだとゆるす人たちの生活が、それがそのまま救われるのだと、どこに妥協されてあります。「悲しきかな……はづべし、いたむべし。」のお言葉は、しよせん涙の告白であります。利欲、愛欲、名聞の生活をいかに厭うていられたか、いかにそれらが人間の道草であり、真実生活をくらます、そらごとたわごとの日暮しであるかを、深刻に厭い嫌つていられたかを知ることが出来ます。親鸞聖人の生活は、そうした浮いたものの上に築かれてはなかつたのであります。そんなものを棄てた所に、真実生活は打ち立てられてあつたのであります。けれどもこれは単に聖人のみの真実生活ではないのであります。万人が万人、もし、「人生とは何ぞや」の深い所に心をひそめて、目覚めるならば、どうしてもそこに立ち返らなくてはならぬのです。

財産の上に自分を建設している人には、聖人の道は歩めませぬ。

地位の上に自分を建設している人には、聖人の道は歩めませぬ。

名誉の上に自分を建設している人には、聖人の道は歩めませぬ。

愛欲の上に自分を建設している人には、聖人の道は歩めませぬ。

財産に見切りをつけ、地位に見切りをつけ、名誉のつまらぬことに目覚め、愛欲が滅亡への道であることに目覚めて、一切に見切りをつけ、一切に用事のないことが知れたもののみ、そこに永遠への道は開けて来ます。

愛欲、名利等に毎日の全部を費して平気な連中が、聖人のさきに出したお言葉に賛成して、「そうだ私が丁度その通りだ。それでなくてはこの世が立たん」と言っています。そうして如来に救われた気です。何というお目出度いことでしょうか。聖人の一生を一貫する血の滴るような体験のみ言葉も、あわれ煩惱生活の言いわけとなり、迷い人の遊戯になつてしまいました。

現代人の生活が、特に日本人の現在の生活は、「成金病」にとりつかれ、成功熱に浮かされて、**全く目的**は、富であり、名誉であり、地位であります。こうした社会の空気を呼吸して、不自由とも、汚いとも思わない今の社会では、むしろ永遠の道である親鸞聖人などの内に、自分を見出そうとする人の少いのが当然であります。でなければ、真宗だと言ひ、親鸞教だと言えども、それは真実のものではないのであります。民衆の大部分が目覚めないのがほんどであります。

私のこうした話を聞けば、片押しにものを言う人は、「それでは家を捨てよというのか。公職をもやめよというのか。財産をもなげ出せというのか。」という人があるでしょう。それは話に囚われた人たちであります。

何の考えもなく一時の快樂にふけらんがために、放縦な生活をしている者もまた魂を見失うた迷いの人たちであります。

財産の一つもない人であつても、財欲にひかれた人があります。沢山の富を持つても、心はそこにいない人があります。小役人の中でも、一生地位ばかりにあくせくして、死から死へ行く人があります。乃木大将のように、高い地位と、名誉とにおりながら、そこには魂を立てなかつた人もあります。もちろん親鸞聖人は、有名でもなければ、門跡でも法主でもなく、ただ哀れな乞食僧でありました。明治の博文豪夏目漱石は、文学博士の学位をとらなかつた人であります。西郷南州は城山に賊名をおうて死にましたけれども、彼は地位もいらず、名誉もいらず、富にも目をかけなかつた人でありました。

赤く生きているものには赤い光があります。青く生きているものには青い光があります。黄色に生きている者には黄色な光があり、白く生きている者には白い光があります。死んだものには光がなくなつて灰色にかかります。濁りが来ます。悪い臭が出ます。富にひかれ、財産にひかれ、名誉にひかれて、唯々動いている人たちは生命の死んだ人であります。生命の死せる者は、やはり灰色にかかります。そうして光を失つて来ます。更にその人の内からも、その周囲からも悪臭が出て来ます。貪欲と6 瞋恚、愚痴、嫉妬、それ等は死せる人から出る悪臭であります。

阿弥陀仏は久遠の光明であります。一切の迷いを打ち破つて輝くのであります。南無阿弥陀仏と一体に生きざる者は生きております。生きているが故に輝いています。青い人間の内に流れる時、青い光となり、黄色には黄光となり、赤い人格には赤光となり、白い個性には白い光として輝きます。

信仰とは人生の方向転換だというのは、目覚めないでただ常識のままに、周囲の動くままに動いていた者が、そんな生活に目覚めて、一度一切におさらばして来るのです。そうして罪深い自分たちの一切をあげて救われるのです。暗から光にかわつて来るのです。

さわさりながら、私はともすれば死せる富に、名誉に地位にあこがれ、それにひかれて死の道に行こうとします。けれどもそこに念々称名常懺悔の自分を見出すのであります。

働きもします。食いもします。地位も名誉もつきましようけれど、それが決して生活の目的でも、第一義でもないのであります。働いても、作つても、商いしてもそれによつて引きづられないで、そこに自分の全体をなげこんで報謝するのであります。

私は大臣にも名誉や地位や金のためでない大臣が出来、政党もそんなものの上に死んでいない政権が生れ、学者も軍人も宗教家はもちろん、その他全ての国民がかくの如く目覚め、ひいてかかる文化が全世界に生れる日がほしいのであります。こうした

世界をにらみ、かかる境地を味わっている私には、とてもじつとしていられぬのであります。歩め！ 歩め！ 歩まぬ者は死ぬるのであります。歩むとはただ足で歩むことではないのであります。眞実生活、即念しかし、実行し、深めて向上の一道をたどるのであります。